

ノディングズの「ケアリング」教育の射程と課題

—今日の親密関係の変容を中心に—

ZHANG Linhong

本稿は、今日の学校内で起きている生徒同士の親密な他者との関係性の捉え方の変貌を中心に、「ケアリング」教育の必要性と課題を明らかにする。1990 年代前後を背景に、提唱された「ケアリング」教育論は、今日の日本社会の変動や、若者の間で起きている親密関係の変貌にあわせて、なぜ必要であるか、またそれを実現させていくために、どんな課題を直面しているかを、明らかにしたい。それに基づいた上で、それぞれの課題に適した提案を検討する。

第 1 章では、ノディングズによって提唱された「ケアリング」教育の中身や、その特徴を概観した上で、「ケアリング」教育の必要性や、具体的な実践法を紹介した。「ケア」という言葉は、ラテン語の cura から由来し、そもそも医療・介護・福祉などの分野で幅広く使われていた。そして、近年では人間関係の中にも「ケア」という用語を使われるようになった。こうした中で、教育哲学者のノディングズは、「ケア」の視点から、相互の関係性に基づいた上での「ケアリング」の教育論を提唱した。学力中心の日本の学校教育においても、「ケアリング」教育の視点を扱う必要性があると考える。そして、第 1 章では、まず、「ケア」という用語の異なる分野における意味づけを紹介した上で、「ケア」と「ケアリング」の定義づけの具体的な違いを明らかにした。そして、リベラル・エデュケーションへの批判を説明し、教育学における「ケア」の必要性を確認した。さらに、学校内の諸人間関係を場面ごとに振り分け、それぞれ適応した「ケアリング」関係の構築案をノディングズの主張を紹介した上で、学校内の理想的な「ケアリング」関係のあり方を見た。

「ケア」と「ケアリング」という用語は、曖昧に使われることが多いが、今回の分析では、「ケア」を「個人のニーズに対する援助的行動、またはその具体的な現象」とすると、「ケアリング」を「こうした援助的行動やその具体的な現象を目指す行動」とすると、区別して定義づけることができた。そして、個々人が多様化しつつある中、万人向けのリベラル・エデュケーションは、むしろ時代遅れになったことがわかった。最後に、ノディングズが描いてくれた「大家族のような」親密な関係の青写真は、今後の「ケアリング」教育の取り組む方向性を示した

その上で第2章は、「親密な関係」および「親密圏」の捉え方の変遷を整理した上で、今日の若者にとっての「親密な関係」もしくは「親密圏」のあり方を確認した。とりわけ、学校教室にあふれる「優しそうな関係」の裏面に潜む、個々人の承認渴望を見てきた。さらに、「個人主義」が繁栄する今日の社会状況の下で、学校教室に「親密圏」の構築の難しさを検討した。こうした上で、改めて「ケアリング」を土台とする学校教育の必要性和意義を検討した。

その中で、まず「前近代」や「第一の近代」や「第二の近代」における、親密圏および親密性の捉え方の特徴を整理した。「前近代」では、はっきりとした「親密圏」あるいは「私密圏」は存在しなかった。個人生活は、地域または近隣の人たちに半公開的な状態が続いた。そして、「第一の近代」では、初めて小家族を単位とする「私密圏」もしくは「親密圏」の概念が現れてきた。その一方、若者にとって「家族」は絶対的な「親密圏」であった。さらに、少子化の進行により、親が、すべての愛情や金銭を一人の子どもに注ぎ込んで育てることが特徴であった。それゆえ、若者は安定的なライフステージを踏むことが可能であった。だが、急速なグローバル化や個人化によって、「第二の近代」における「親密圏」の枠組みは家庭と国境の壁を越えた。そこで、諸個人を基本単位とする「親密圏」の概念が生まれた。それと同時に、個人はあらゆる面から自己選択や自己責任へと追い込まれるようになった。いわゆる、個人責任の「リスク社会」とも言われている。こうした中で、若者の「親密」に対する感覚も変容した。今日若者は、親密な他者に対して装った自己を演出する。その一方、関係のない他者に対しては、無関心の「素の自分」を表出することがわかった。こうした高度な気遣いの中で、家族のような「親密圏」の構築は、学校教育において一体どこまで実現することができるのかを検討した上で、今後の課題として「生徒－生徒」関係に関心を向く必要性を見出した。

第3章では、前章を踏まえた上で、「ケアリング」教育論の実現可能性を再検討した。そして、「自然なケアリングの心情」の可能性や、助けあう「ケアリング」関係の構築の可能性という二つの方面から、ノディングズの「ケアリング」教育論の限界性や課題を分析した。さらに、その二つの問題点に対しての解決法を、それぞれ提案する。一つ目は、援助し合う活動の中でケアする・されることを経験する機会を、生徒たちに提供すること、いわばピア・サポート活動によって、彼らの「自然なケアリングの心情」を育てていくこと、さらに、タテの「教師－生徒」とヨコ「生徒－生徒」という二者関係の緊張度を緩和するために、斜めの空間としての「保健室」のような空間を創出することを提案した。

最後に、終章は本研究の到達点や、「ケアリング」教育をさらに深めていくのに、今後の着目すべき点を検討した。さらに、「ケアリング」の視点から見た、中国の学校教育の問題点や、本稿で検討したことを、中国にどう応用できるかを、検討した。